

製本のススメ

Vol. 86

桜の便りが届いています、不況でも震災でも、忘れずに春は来て草木が芽吹き風は暖かくなります。あわただしい季節でもありますが、心のゆとりは持ちたいものです。

今回はフランスの話し

この頃 活字が見直されはじめ、タイポグラフィの個展も時折見かけます。活字の読み易さや面白さがデザインの世界で芽吹いているのでしょうか？また製本スタイルにも、この頃変化が見られます。大量に安く早くと並行して少部数ながらも趣向を凝らした本の依頼が来るようになりました。以前は趣向を凝らすといえば上製本でしたが【フランス装丁】という話もチラホラ。

さて**フランス装丁ってナニ？**という人の為に少々解説しますと、フランスが発祥国という訳ではありません。洋風な製本加工が日本に伝わった時に、ヨーロッパ製本では呼びにくく、当時 ドイツ装丁という（上製本に似た）加工方法があったので、並製本に似たそれをフランスと呼び始めたそうで、いつの間にか定着しているらしいのですが、裏付けはありません。

並製本の元祖とも言えるこの加工は、**三方にチリが付きます**（上製の様に表紙が本文より少し大きい）**表紙は四方折り返してあります**。その為にいつもの無線綴じの如く、表紙をつけて天地・小口を断裁することができません。

上製本の様に、本文も表紙も作り上げて、最後に合わせます。当然ですが、見返し付です（しかし、見返しの小口側は接着しません）表紙用紙ですが塗光紙は不向きです、多少厚みのある里紙やラシャ・ヴァヌーボなどがよいでしょう。このフランス装丁を簡略したものに【雁垂れ(ガンダレ)表紙】があります。小口のみカバーの様に折り返している表紙で天地は断裁します。こちらは、紙質をあまり選びません。いずれも一般的な無線綴じとは違う味わいがあります。



Teabreak

今ではあまり使われませんが、昔は普段通りの生活を「褻(ケ)」の日と呼びました。これに対して祭事など行う日を「晴(ハレ)」の日として、日常から抜けて特別な日を過ごします。普段通りの生活がうまく行かないと「ケが枯れる→ケガレ」となり、お祓いをしたり禊ぎをしたりで、身をケガレのない状態にしたそうです。現代ではケの日という考え方は薄れましたが、ハレの日は残っていますね。晴れ着・晴れ舞台・晴れの日が続く春は、素敵ですね。

by (株) 井関製本